

博士学位論文要約：

## 現代フランスのイスラモフォビアに対する

### ミドルクラスのムスリムの反応／実践の社会学的研究

山下泰幸

本論文は、筆者がおもにフランス・パリにおいて実施した、マグレブ（北アフリカ）系のムスリム（イスラーム教徒）を対象とするインタビュー調査の結果に基づく、社会学的な質的調査研究である。フランス社会においてイスラモフォビア（イスラーム嫌悪）がますます拡大する中で、差別をなるべく回避して階級を再生産し、より良い生を送ろうとする、（アッパー）ミドルクラスのムスリムたちの日常の実践を分析するものである。こうした分析をとおして、筆者が「方法論的オリエンタリズム」と呼ぶ、既存の研究でしばしば見られる方法論上の問題点を乗り越え、イスラモフォビアの対抗言説となり得るようなムスリム研究を模索することを目指す。

イスラモフォビアとは、オリエンタリズム (Said 1978=1993) 的な思考様式に基づいて、イスラーム教徒（もしくはそうみなされる者）の有する文化的な差異を強調して他者化し、彼女ら彼らを劣位に置いたり排除したりするような文化的レイシズムの一形態である。現代フランス社会においては、ムスリムを対象とした根強い就職差別や入居差別 (Institut Montaigne 2015; Ifop 2019)、路上でのヘイトクライムの増加 (CCIF 2020) や、ムスリムの排除を呼びかける極右政治家の台頭など、イスラモフォビアは悪化の一途をたどっている。フランス革命の精神を受け継いだネーションの統合原理である共和主義やライシテ（国家と宗教の分離原則）を毀損する共存不可能な他者としてムスリムたちはしばしば表象され、その排除が正当化される傾向にある。

19世紀から20世紀にかけてフランスは、啓蒙主義を体現する「文明化の使命」の名のもとに世界各地で侵略行為を行い、広大な領土を支配する植民地帝国を作り上げた。その結果、北アフリカのマグレブ諸国は長期にわたる苛烈な植民地支配を受けた。とりわけ130年間にも及ぶ大規模な入植活動、さらに虐殺や拷問という凄惨な暴力を伴う独立戦争を経験したアルジェリアでは、農村の人びとの伝統的な生活基盤は徹底的に破壊され、無産市民と化した多くの農民が都市に流入した (Sayad 1999)。こうした状況は、後に旧宗主国であるフランスの高度経済成長を支える労働力として、北アフリカからの労働移住の大規模な波が生じるその背景となった (Noiriel [1988]2006=2015)。今日のフランス社会で暮らすムスリムの大多数は、かつての植民地からの移住者およびその子孫である。

M.スムートによると、ポストコロニアル状況とは、かつて宗主国の外部の植民地において生じていたような複数の文化の相互作用が、植民地独立後の時代において、旧宗主国の内

部にまで拡張され生じている状況を指す (Smouts 2007)。こうした定義に従うと、フランス国内で暮らす、かつての植民地にルーツを有するムスリムたちに対して、植民地帝国時代やそれ以前から連綿と蓄積されてきたオリエンタリズム的なムスリム表象に基づくスティグマが付与されている今日のフランス社会は、まさにポストコロニアル状況そのものである。

ライシテがナショナル・アイデンティティとして認識される傾向が強まっている中で (Baubérot 2014)、本来ライシテが有していたはずの信仰の自由を保障するという側面は忘却され、公共空間における非宗教性の規範としての側面ばかりが強調されている。その結果、いわゆる 2004 年の「スカーフ禁止法」をはじめ、ライシテを理由とした種々の法整備やそれに向けた過熱した議論の影響により、ムスリム女性の社会参加が阻害されている。また、イスラームを標榜する凄惨なテロ事件がフランス各地で繰り返される中で、例外法規が常態化され、「過激思想」と無関係なムスリム個人や組織に対する家宅捜索や解散命令が出されるなど、ムスリムに対する「集団的懲罰」(ADM 2019) の様相を呈した司法判断が続いている。以上のことから、フランスではイスラモフォビアの制度化が進行しつつあると言える。

さて、自己認識と他者認識は常に相互に影響を与え合うものである (Brubaker 2013=2017) ことを鑑みると、フランス社会においてムスリムであることを理由とした排除がはびこる中で、イスラームを信仰するマグレブ系移民の第二世代の人びとについて社会学的に分析するに際して、ムスリムという分析カテゴリーを用いることの妥当性はますます高まっている。しかしながら、学術的な研究においてムスリムたちの実践が分析される際には、しばしばその文化的差異を前提に、信仰の強度や信仰実践の多寡、イスラームの教義による説明が試みられるといったように、単純化された方法論が選択される傾向にある。ムスリム研究のあり方を問い直す嶺崎寛子が指摘するように、「宗教や教義は、ムスリムたちの日常生活を構成する一つの要因ではあるが、決定的で唯一の要因ではない」(嶺崎 2019: 202-3) ことを確認する必要があるだろう。このように、文化的な他者とされるようなマイノリティを研究する際にのみ、文化決定論に基づくような単純な方法論が選択されるという問題を「方法論的オリエンタリズム」とよび、本博士論文においてこれを批判する。

こうした学術上の問題を乗り越えるために、ムスリムの実践を解釈する際には、ジェンダーや階級、世代間の差異、学歴や居住地など、信仰に直結する要素以外のさまざまな変数に注目し、重層的な分析を試みるのが重要である。本博士論文ではその中でも、全ての章にわたる共通の視座として、階級に特別な注意を払う。より具体的には、ミドルクラスのムスリムの日常実践に焦点を当てる。なぜなら、フランスのムスリムをあつかう先行研究はしばしば、移民をルーツとする庶民階級の人びとが集住するような低家賃住宅で構成された団地が立ち並ぶ大都市郊外で暮らすムスリムに関心を集中させるか (例えば Kepel 2012; Talpin et al. dir. 2017)、そうでなければムスリムの信仰実践が原因で生じるさまざまなコンフリクトに関心を集中させてきたからである (例えば Geisser et al. 2017; Gaspard et

Khosrokhavar 1995)。これら一つ一つは重要な研究ではあるものの、しかしながら全体的な傾向として、ミドルクラスのムスリムの存在が学術的研究において不可視化されていることは問題であると言える。前者のような研究群について言えば、R.ブルーベイカーがアメリカのエスニシティ研究のあり方を批判する際に述べたように、「個々の人間や広範な社会的プロセスよりもエスニック・コミュニティ、顕著にエスニックな特徴を持つ場所、エスニックな組織などに焦点を当てることで、これらの研究はそのように際立ってエスニックな特徴を示す場所の外に移動した人々」を見落とすことになる (Brubaker 2001=2016: 215)。後者のような研究群について言えば、N.ギョレがまさに指摘するように、『『社会の大問題』の典型として (représentatif des « grands problèmes de la société)』のムスリム以外の、取るに足らない「普通のムスリム (musulmans ordinaires)」、すなわち例えば「社会的上昇移動を享受する者や、ミドルクラスに属する者」そして、「自らの特性や信仰や文化をその市民性と適合させることを望みながら」さまざまな職業に従事するようなムスリムは不可視化され、分析の「脇に置かれている」(Göle 2015:11)。ミドルクラスのムスリムを研究することは、こうした学術的な要請に応えるものである。

そこで本研究に先立ち、筆者はフランスのムスリムの中で多数派を占めるマグレブ系のうち、移民第二世代のミドルクラスのムスリムに対して、主に首都パリ付近でインタビュー調査を実施した。ミドルクラスか否かの判断は、学歴(日本の大卒相当以上に該当するバカロレア+3年以上)を主な基準としつつ、職業や経済状況などから総合的に判断した。学歴を重視した理由は、フランスが、学校修了時などに取得する免状/資格類が職業的地位へのアクセスに決定的な役割を果たす「免状社会(学歴社会)」だからである (Blanchard et Cayouette-Remblière 2016=2020)。さて、ミドルクラスのムスリムを対象に含んだ質的調査に基づく先行研究の多くは、階級上昇移動に成功するムスリムたちを捉えるものであった (Arslan 2010; Beaud 2018; Truong 2015)。しかしなら本調査の対象となったインフォーマント全体の傾向として、自分たちの世代のみで学業を通じた階級上昇に成功したものはほとんどおらず、多くのケースにおいて、移民第一世代にあたる両親、特に父親の学歴が高く、安定した職業についていた。そのため、本博士論文で扱うライフヒストリーはいずれも階級上昇の語りというよりも、イスラモフォビアという障害をなんとか回避しながらミドルクラスの階級を再生産する語りであった。

本博士論文の具体的な章立ては以下の通りである。第一章では、フランス社会で暮らすマグレブ系ムスリムが置かれている歴史的な脈を主に歴史学の先行研究に基づいて説明する。まずフランス革命から北アフリカへの侵略の開始、そして文明化の使命によって付き動かされた植民地帝国の建設の歴史を見る。そして二度の世界大戦への「ムスリム兵」の動員から、北アフリカにおけるナショナリズムの高揚と独立運動の歴史的経過について述べる。後半部ではフランス社会におけるムスリムの定着の歴史を追い、現代にいたるまで「ムスリム問題」が社会的に構築されていく流れをたどる。そして最後に、先に見たような植民地主義の歴史とも不可分であったような、啓蒙思想の流れを汲んだ国民統合イデオロギーである共

和主義やライシテという抽象的な概念について批判的に検討する。

第二章では、フランス社会で生じている宗教的な他者化の過程であるイスラモフォビアについて、その定義や、具体的な差別の現状を見る。イスラモフォビアは、植民地主義と不可分なオリエンタリズムによって形成されてきたイスラーム表象の（言説的な）蓄積を利用して作動している。さらに方法論的オリエンタリズムという概念を提起することで、学術研究においてムスリムをあつかう際の問題点を整理する。こうした方法論上の問題が生じるのは、研究者の思考もまた、社会のイスラモフォビックな文脈から自由ではないという証左である。オリエンタリズムという共通の罠にからめとられることで、研究者の選択する方法論は、現実社会の文脈に拘束されていること明らかとなる。

第三章では、宗教や人種、エスニシティに基づく分類統計が原則的に禁じられているフランスにおいて、フランスのムスリムの人口構成に関して参照可能な統計データを紹介する。ミドルクラスのムスリムの実態を把握できるような量的調査はさらに限定的であるが、ムスリムの職業的な多様性や、ムスリムの学歴がマジョリティのものと近似しつつあることを示すことで、ミドルクラスのムスリムの存在が示唆される。また、質的調査に基づく先行研究もレビューするとともに、筆者の実施した質的調査の意義と限界、またインフォーマント全体の傾向について論じる。

本博士論文の中心的な分析パートである第四章から七章においては、扱うインフォーマントの人数を最小限に絞り、十分な紙幅をもって当人ならびにその両親のライフストーリーを描き出すことに注力した。これは、各章において一つ一つのエピソードを分析する際に、その出来事を彼女ら彼らの人生の文脈の中に位置づけ、より共感可能な形でその実践を行うに至った、当人らの内なる合理性を描き出すためである。

第四章では、量的なアプローチにおいてマイノリティの同化の指標として用いられることの多い「言語」や「名前」という要素に着目する。アルジェリア系二世の女性の語りから、彼女がアラビア語を喋れないことや、アラブームスリム風とみなされる名前ではないということが、どのような影響が生んできたかをミクロな観点から明らかにする。「同化」という現象は決して単線的かつ自動的に進行する何かではない。ジェンダーや階級による影響を受けながらさまざまな痛みや葛藤の中で「同化」は経験されていた。また、完全なる同化は不可能であるかもしれないが、結果としてフランスにおいてもアルジェリアにおいても抱えざるを得ない自身の「異邦人性」を、彼女は時に資源としてうまく利用していた。

第五章では、大企業で働く中で、周囲とコンフリクトを起こしかねないイスラームの信仰実践を回避することを自分の中でうまく正当化し、罪悪感をおぼえずにフランス社会の中に溶け込んでいこうとするアルジェリア系二世のいとこ同士の二人の男性を分析した。ここではイスラームは、7世紀から継承されてきた不変な道徳の束ではなく、こうした柔軟な実践によって日々再構成・再生産される文化的産物として捉えなおすことができる。ここでは宗教が行動を規定するのではなく、ミドルクラスの文化的な価値観などに基づく実践が宗教のあり方を規定しているのである。

第六章では、前章と同じアルジェリア系二世の男性が、庶民階級のムスリムが多く住むとされる「郊外」に住む幼なじみと自らのことを距離化するような語りを分析する。そこでは同質な人びとの集団の中に閉じこもる人びとと、差異に開かれた精神を持つ自らが対照されていた。こうした思考の背景には、ネオリベリズムに適合的なミドルクラスのコスモポリタン志向や、努力によって成功は可能であるという強い信念があった。

第七章では、今日のフランスにおいて増加していると考えられる、フランスから国外に移住するミドルクラスのムスリムについて分析する。これまでのミドルクラス移民の研究では、グローバルに評価される移住資本について注目がなされてきたが、ここでは植民地主義と結びついたイスラモフォビアという文脈の下でなされる一種の国外脱出として、政治的な側面を射程に入れながら分析する。ここで取り上げる男性は、フランス軍のアルジェリア戦争における暴力の記憶を両親から継承しており、フランスの国家的なイスラモフォビアへの恐怖が高まった時、彼をドイツでの新生活を選択した。

最後に本博士論文の結論では、ムスリムを研究する際に、多様で複雑な変数を考慮にいれた重層的な分析が必要であることをあらためて総括し、単純な説明図式を採用しようとする方法論的オリエンタリズムの危険性を再確認する。また、例えばムスリムの間で生じているある種の階級的な分断は、マジョリティの間で生じている階級的な分断と非常に近似したものであった。こうしたことから、マイノリティを研究する際には、マイノリティとマジョリティの差異に基づいた理論ではなく、むしろ共通性に基づいた理論を構築することが求められる。それはムスリムの文化的な差異を強調する今日のイスラモフォビアを前にして、研究者が生み出し得る対抗言説のひとつなのである。